

# 職能としての漢才

—— 『枕草子』 「頭中将のすずろなるそら言を」 の段を中心に ——

藤 本 宗 利

## **A Study of Makuranosoushi (3)**

Munetoshi FUJIMOTO

群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編

第 66 卷 1—16 頁 2017 別刷



# 職能としての漢才

——『枕草子』「頭中将のすすろなるそら言を」の段を中心に——

群馬大学教育学部国語教育講座 藤 本 宗 利

## 一、嫌悪される作者、嫌悪される作品

小学館新編日本古典文学全集の『枕草子』月報に、作家の田辺聖子氏が興味深い文章を寄せている。「魅惑の女・清少納言」と題するそれは、いかにも田辺氏らしい筆で、『枕草子』の魅力を紹介する内容。『枕』のみならず、『源氏物語』をはじめ多くの古典作品にも精通し、なおかつ洒脱な眼をもって世相を描くことを身上とした小説家ならではの、鋭い感性が感じられて、短いながら味わいのある作品論になっているのであるが、その冒頭近くで、氏は昭和五〇年代以前の『枕草子』論のあり方に対して、なかなか手厳しい評を下している。

氏の言うところによると、小説『むかし・あけぼの』執筆にあたり、資料として目を通した研究書は、注釈書・評論を問わず、「信じられないような清少納言への冷評が多かった」というのである。

中には男のヒステリーといたいほどの感情的な文章で、清少納言を罵倒する評論家もあった。当時はまだ女流文筆家の数も少なく、古典エッセーや、大衆啓蒙的古典案内の筆をとるのは、男性文筆家が断然、多かった。

さて清女が男性から嫌悪される理由の第一は、おしなべて彼女の自己顕示欲にあるらしい。スタイリストで切れ者の高官、藤原

齊信や、当代一流の文化人藤原公任と互角に渡り合って、彼らに「やられた！」と叫ばせたエピソードなど、(得々と書いて自慢している浅はかさが見るに堪えない)というのだ。少々の学問素養があるからといってそれをひけらかすのは生意気だ、という口吻であった。

実際『枕草子』という作品を、「清少納言」という作者の人となりに収斂させた上で、その作品としての価値を否定するような論が圧倒的な多数派であったことは、かつて『枕草子大事典』において「研究・評論史」を概観した折に、筆者自身が指摘したとおりである。ここでは昭和五二年一月刊行の『解釈と鑑賞』に収められた中野孝次氏の「平安朝のメイトレスたち」という文章を採り上げ、当時の『枕草子』研究の置かれた状況を論じたのであった。

氏は、『紫式部日記』の清少納言評として知られる、次のごとき一節を踏まえ、少納言のことを「一言でいって実にいやな女」と切って捨てる。

「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち真名書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬことおほかり。かく人に異ならむと思ひこのめる人は、必ず見おとりし、行末うたてのみはべれば(校注日本文学大系、昭和十

二年本による<sup>(1)</sup>

その上で『枕草子』という作品を、「あさはかな古典」と言い落しているのである。

さて、そんなわけで私は『枕草子』など今後二度と読むこともなからうし、今回この文章をひきうけたのも、こんなものが古典の名で何度でも「時を得顔」に復活してくる、それがどんなくだらぬことを確かめるため以外の目的があつてではなかつた——

後略

ここまでの激烈な罵倒ではないにしても、「清少納言には人格的な欠陥がある、それゆえ『枕草子』も作品として低級である」という見方は、多かれ少なかれ、『枕草子』に否定的な論のほとんどに、共通して見出されるものであつた。中野氏個人が自らの価値観に照らして、作品の好悪を論じるのは、はっきり言つて論者の勝手であらう。むしろ問題は、『枕草子』の特集号として編まれたこの雑誌が、対象の作品を「こんなもの」呼ばわりする、このような文章を組み込んでいるという事実である。なぜならそこには、読むに値しない古典としてこの作品を位置付けようとする、五〇年代までの研究の姿勢が、さながら透かし模様のごとく浮かび上がってくるからである。

利宗本藤

ところで、こうした『枕草子』誹謗論の源流の一つとして考えられるのは、中野氏の文章においても引用されていたごとく、藤岡作太郎氏『国文学全史 平安朝篇』の中の『枕草子』論であらう。

多くの記事は自讃に充ちて、清少納言が驕慢の性を表せり。その自讃は概ね己が学識に關し、その艶容麗色に誇るが如きことは、殆ど見るべからず。思うに清少納言は蛾眉朱唇、花の姿あるにあらず、もとより和泉式部が大幣の引く手数多なる類にもあらず、御堂殿に音なわるゝ紫式部にも及ばず、鏡中の影に山鳥ならぬ木菟の、己が姿を喜ぶ能わざりしなるべし。その契りかわしし人、

さきには修理介則光あれども、愚直にして文才なきを以て、これを斥けてわが耦とせず。藤原斉信、同行成は才貌拔群の殿上人、またただなる中にもあらねど、かれらが少納言を愛するは、その学識をめざるものにして、その容貌を愛するにあらず。少納言が斉信に並んでは、われながら疎ましきほど、齡過ぎ、姿揚らざる由は、己が筆にこれを言えり。されば女性に通有なる虚飾の念に、少納言が深くみずから誇りとするところは、その才識にあり。詩文に明らかに、名句を暗んじ、類才表に顕われ、傲慢人を凌ぐ性は、篇中至るところに見ゆ。さればこそ紫式部日記に評して、「清少納言こそしたり顔に、いみじう侍りける人、さばかりさかしだち、真名書きちらして侍る程も、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり」といい、また榮華物語にも「清少納言などいであひて、せうくの若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひ」といえるなれ。

藤岡作太郎『国文学全史2 平安朝篇』第三期 第七章枕草紙  
氏の言うところ、『枕草子』には「自讃」の記事があふれているが、その自讃は「己が学識に關」することであり、作品に充ちるそのような学識的記述は、「清少納言が驕慢の性」「傲慢人を凌ぐ性」をあらわすものだというのである。

この指摘は先述したごとく、その後の緒論に異口同音にくり返されていく感があるが、それでも藤岡氏の論そのものは、以下のごとく清少納言の文才や作品の価値全体を否定するようなものでは決してなく、田辺氏のいわゆる「男のヒステリー」的評論に比べれば、はるかに理性的であつたとも見ることができよう。

さばれ清少納言は平安朝第一流の大家たるに耻じず。その折にふれて書き捨てたる枕草紙は、紫式部が苦心慘憺たる源氏物語と對比すべく、長短相反したるところ、また頗る見るべし。少納言は趣味に富み、よく物の雅俗美醜を弁ず。その山川草木を品し、

世の有象無象をを評したる、所言肯綮こうけいに中り、案を拍うつて歎称せざるを得ざるものあり。

## 二、日記的章段における漢文引用

清少納言が「艷容麗色」ならざるがゆえに、才識を誇るしかなかったという藤岡氏の論理はさておき、「藤原齊信、同行成」といった「才貌拔群の殿上人」たちが、彼女の「学識」を愛したということは、確かに作中の、いわゆる日記的章段のうちにくつも見出すことができる。

言うまでもないことながら、平安時代の作品を対象に「学識」と言い「才識」と言う時、それは具体的には漢文学の知識のことを指すというのが常である。したがって、「学識に関」する「自讀」という藤岡氏の指摘に相当する箇所は、いわゆる日記的章段において、中宮定子や主家の人々、殿上人たちとの間で交わされる漢籍を踏まえたやりとりのことを、主として指しているよう。それらの記事においては、清少納言と相手とのやり取りの中で適宜に引用される漢詩文の一節が、人々の賞讃を浴びるという展開が一般的である。

ちなみに日記的章段の中に、清少納言が漢詩文を引いた発言をしている章段は一四ある。うち一段中に二例の発言を含んでいる場合が二段あるので、全部で一六の用例を数えるわけである。

その一六例中、平生昌邸の門の小ささを難じ、『漢書』于定国の故事を引いて、行啓供奉の女房車が入らないと文句を言い掛けた「大進生昌が家に」の段や、琵琶を立てて顔を隠した中宮の仕草を、『白氏文集』「琵琶行」を引き合いに褒めたたえた「上の御局の御簾の前にて」の段など、少納言の方から漢詩文を踏まえて発言している場合は三例のみ。他の一三例は、いずれも会話の相手側から言葉をかけられて、返答した例であることは注目されるべきであろう。つまり相手からの発信

を受けての漢文引用が特徴であって、「清少納言が驕慢の性」「傲慢人を凌ぐ性」という評言がもたらす、自ら進んで才学を見せびらかすような、強烈な術学的姿勢の印象とは相容れない実態なのである。

この中には名高い香炉峰の雪の風流譚（「雪のいと高う降りたるを」段）のように、漢詩文引用による表現（発言なり、手紙なり）を相手の方から寄せられている場合もあれば、漢詩文以外の形で言い掛けられた返答として、漢詩文の引用で切り返している場合もある。前者の場合が八例。後者は五例であり、これには、たとえば殿上人が落花した梅の枝を送ってきたのに対して、紀長谷雄の詩句をもって「早く落ちにけり」と返答した「殿上より、梅の」の段、藤原行成からの後朝めかした手紙に、『史記』孟嘗君列伝を踏まえて返事をした「頭弁の職しよにまゐりたまひて」の段、職御書司の御簾の下から呉竹を差し入れたきた殿上人に、『晋書』王徽之伝の故事によって「此の君」と応じた「五月ばかり、月もなう」の段などがある。

いずれの場合も、当意即妙の呼吸の良さがうかがえる返答ぶりに眼目があるのであって、踏まえられた漢籍の難解さや、他人の知り得ぬ所にまで及ぶ知識の豊富さなどを誇る性質のものではない。いたずらに自らの学識を振りかざして相手を沈黙させ、場をしらけさせるような性格のものではなく、会話の中で相互に共有し、楽しむことを目的としたものであることがわかる。言われるように、「清少納言が驕慢の性」「傲慢人を凌ぐ性」によってなされる類の言動では、決してないのである。

定子中宮に伺候する女房として、主家の人々と対話することや、後宮を訪れる客人との応対にあたることは重要な職務であった。時には話題が風流韻事にわたることもあったと思しく、和歌であろうと漢籍であろうと、必要に応じて自在に使いこなせるだけの教養が、女房には求められていたのであった。

視点を換えれば、求められていたのは、知識の「広さ」とその臨機

応変な応用力なのであって、「深さ」ではなかったとも言える。社交の場において必要とせられたものは、沈思熟考型の哲学的思考ではない。一座を盛り上げ、和ませる、いわゆる「座持ち」の能力なのであった。つまり女房という職種にとつて、「学識」の提示は社交上の手段なのであって、それ自体を目的としたものではない。『枕草子』日記的章段の中の漢文引用は、かような特質を持ったものだということに注目したいのである。

本稿ではその一例として、「頭中将のすずろなるそら言を」の段を採り上げて、殿上人らが愛したという清少納言の「学識」の特質について考察したい。

### 三、齊信からの試問

清少納言と頭中将藤原齊信との仲たがいのことから、この段は書き起こされている。

頭中将のすずろなるそら言を聞きて、いみじう言ひ落とし、「なにしに人と思ひほめけむ」など、殿上にていみじうなむのたまふと聞くにも、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほしたまひてむ」と笑ひてある……

齊信が清少納言に関する根も葉もない陰口を真に受け、殿上でも、彼女のことを散々悪しざまに言っているというのである。「なにしに人と思ひほめけむ」とは、あんな者を、何ゆえにひとかどの人間と思つて、今までほめてきたのだろうか、という意味。具体的なことには全く触れられないのだが、くだんの「そら言」は、相当に齊信を立腹させた内容だったのであろう。

そんな噂を聞いて、清少納言もきまり悪い思いだったが、だからと言つて、事実ならばこそ弁明でも謝罪でもしようが、いわれもないのにこちらから詫びるといふのもおかしな話だ。まあ、そのうちには彼

も自然と思ひ直してくれるだろう、それまでは静観しようと思つて、笑つて過ごしていたのだつた。

ところが、齊信の機嫌はなかなか直らない。清涼殿上の御局ごほねの近くを通る時にも、中宮御前に少納言の声などがすると、袖で顔を隠してこちらを見ようとしめないという極端な拒絶。そうなるも少納言の方でも意地になつて、言い訳めいたことは何一つ口に出さない。露骨に不快感を表す齊信の態度をも、見ないようにしてきた。

どれくらいかそんな状況が続いた後で、二月の末ごろ——と言つても、旧暦であるから、今で言えば三月の末ごろ、花の季節であるが、ひどく雨の降る夜のこと、清少納言が自室から中宮御前へ上がつてみると、思いがけなく、主殿司とのもりづかみを遣わして齊信から手紙が届けられる。

見れば青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覽せさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむむいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃すじぶに、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返り事も言はず。

手紙は「青き薄様に、いと清げに書き」つけられていた。「青き」は、この場合、緑色を指そう。「草庵」からの連想と思しい。「薄様」というのは、ごく薄手に漉いた鳥の子紙で、恋文や親しい人との趣味的なやりとりなどに用いる高級紙である。二枚重ねて用いられることも多く、装束の裏の色目同様に、季節の草花の彩りに見立てられる。またこの紙は薄い割に丈夫で、手紙の料紙とされる場合、できるだけ細く巻くのが風流だと考えられていた。齊信からの手紙の料紙が重ねられていたかどうかは明らかでないが、いずれにしろ細く巻いたうえで、結んであつたと想像できる。



したがって外観からして、手紙が公的な内容であるはずもなく、受け取った側からすれば、彼からの私的な消息文であることはただちに了解できたはずである。このところの彼との気まずい状況から考えて、わざわざ手紙をしたためてきたことを思えば、今以上に関係が悪化するような内容——たとえば絶交宣言のごとき——であるとは考え難い。となれば、仲たがいの原因となった誤解が解けたというような経緯を述べて、それとなく仲直りを求めるような内容を推量したことであろう。

だからこそそのような込み入った個人的な内容の文を、朋輩女房たちの前で開けることを躊躇して、彼女はいったん手紙を懐に入れて、使いは帰したとある。ところが主殿司はすぐに戻って来て、ただちに返事をよこすか、さもなくは最前の手紙を返してくれという口上を伝える。しかたなく開いてみたら、書いてあったのはくだんの詩句のみ。予想されたような仲直りに関する内容は一言もない。「心ときめきしつるさまにもあらざりけり」というのは、そういう事情を踏まえていよう。

「蘭省花時錦帳下」とは、『白氏文集』の「廬山夜雨独宿 寄牛二・李七・庾三十二員外」と題する詩の一節。「廬山雨夜草庵中」と対句となっている。「蘭省」とは尚書省のこと。詩句の意味は牛二・李七・庾三十二などといった旧友たちは、尚書省の役人として、今この時に天子の錦の帳のもとに待し、華やいた生活を送っていようが、自分は都から遠く離れたこの廬山の麓に庵を結んで、独り寂しく夜の雨に降り込められていることよ」というところ。自らの境涯の転変を嘆いた内容である。

このやりとりは二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなる夜のこととある。二月末ごろという時期が、詩句の「蘭省花時」に呼応しており、「廬山雨夜」の句が当日の天候・時刻とまさに重なっている点に注意したい。つまりこの詩句は、この夜の問答に用いられるの

に、見事なほどにふさわしい趣であったと言える。

この手紙、文言のみを見れば、対句の一方を掲げて「末はいかに」と記すのであるから、いかにも露骨な試問である。漢詩文を必修とされていた男性官吏たちが、そうではない立場ながら、世間からは一応ひととおりの漢文の知識があると目されている女性に対して、「それじゃ訊くけど、これ知っている？」という姿勢で、その知識を試している体である。おそらく清少納言が正答を出したら、それを契機として、再び交際をしようという腹積もりだったと思われる。

思うに斉信にしても、いったんは立腹したものの、清少納言との絶交状態がこんなにも長びくことになることは不意だったのではあるまいか。そのあたりの事情は、後日談の形でもたらされる。事の成り行きを少納言のもとに報告に来た源宣方の口から、この時の試問に及んだ経緯が明かされているのだが、「なほ、この者、むげに絶え果ててのちこそさすがにえあらね」と、絶交後の所在なさを斉信が後悔している様子や、「もし言ひ出づることもやと待てど、いささか何とも思ひたらず、つれなきもいとねたき」と、彼が少納言との関係回復を望んで先方から何か言ってくるのを待っていた様子がうかがえる。

ところが相手はまるきり意に介さぬ風に振る舞っているので、致し方なくこちらから働きかけることになったという次第である。したがって試問と言っても、決して相手をやり込めるのを本義とはしていない。むしろ正答を期待しての出題であったはずである。

とは言え、相手が相手だけに、あまりに手応えのないような初步的な出題では、かえってこちらが軽く見られよう。出題者側もずいぶんと知恵を絞って、清少納言の知的レベルを考慮したうえで、なおかつこの場にふさわしい漢詩文の問いかけを工夫した結果、案出されたのがこの一句だったと推察される。

#### 四、漢詩句引用をめぐる駆け引き

もちろん清少納言には、問われている詩句などすぐにわかった。そればかりか、そのあまりに直截的な問いかけに込められた、斉信の交際再開の意図も読み取れたと思しい。実を言えば、彼との仲直り自体は、清少納言の方でも待ち望んでいたことの成り行きであったはずである。

少しく溯つて、手紙の届けられた状況について本文を見よう。

いみじうにくみたまへば、ともかうも言はず、見も入れて過ぐすに、二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて、「さすがにさうさうしくこそあれ。物や言ひやらまし」となむのたまふ、と人々語れど、「世にあらじ」などいらへてあるに、日一日下ひひとひしもに暮らしてまゐりたれば、夜のおとどに入らせたまひにけり。長押ながしの下しもに火近く取り寄せて、扁へんをぞつく。「あなうれし。とくおはせよ」など、見つけて言へど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらむとおぼゆ。炭櫃すすびのもとにゐたれば、そこにまた、あまたゐて物など言ふに、「なにがし候ふ」といとはなやかに言ふ。「あやし。いつのまに何事のあるぞ」と問はずれば、主殿司なりけり。「ただこももに人づてならで申すべき事なむ」と言へば、さし出でて、言ふ事、「これ頭の殿とのの奉らせたまふ。御返事かへりごととく」と言ふ。いみじくにくみたまふに、いかなる文ならむと思へど、ただいまいそぎ見るべきにもあらねば、「いね。いま聞こえむ」とて、懐に引き入れて、なほなほ人の物言ふ、聞きなどする、すなはち帰り来て、「『さらば、そのありつる御文を給はりにて来』となむ仰せらるる。とくとく」と言ふ……

先方が自分のことを悪く言うので、こちらの方でも「見も入れて過ぐす」、すなわちなるべく見ないようにして過ごしていた、というのが、もいかにも負けず嫌いの意地っ張りらしさが感じられておもしろいが、

そんな二人のいがみ合いに、周囲は気を揉んでいたらしい。帝の「御物忌」の日、諸臣宮中に籠つて、手持無沙汰をかこっている時、斉信が無聊を慰めるべく手紙をよこそうとしている、と少納言に告げる人がいたというのである。殿上人であろうか。あるいは殿方の情報を取り付けた朋輩女房の誰かであろうか。いずれにしろそんな噂を聞いて、少納言は「嘘でしょ」と言いつつ、まともに取り合わなかったというのだ。

だが口ではそう言いながら、内心では先方が折れてくるのを待っていたと思しい。だからこそ彼女は、「日一日下に暮らし」ていたのに違いない。斉信が仲直りの手紙をよこすとすれば、かなり込み入った内容になろうし、そういう手紙なら、中宮御前よりも自分の局で受け取る方が気楽だからである。そうして夜になるまで待つてから、やっぱり来ないと見切りをつけて、御前に参上したと思われる。だからこそ普段なら喜んで参戦したであろう「扁へん継ぎ」の遊びにも、気乗りがしなかったということなのだろう。

そんな所へ届けられた斉信からの手紙である。内容こそ、期待していたようなものではなかったものの、仲直りのきつかけ作りであることは明白である。返事を——この場合、むしろ試問に対する解答を出すさなくてはならない。

先述のごとくこの詩句、時機にかなっている点では見事な選択であった。

一方で、主殿司を使い立てて、わざわざ御前に届けられたという状況から推して、斉信からの手紙ながら、個人的な立場での消息文というよりは、殿上人の合議による半ば公的な立場からの手紙であろうことは、推量に難くない。おそらく帝の「御物忌」に籠った人々のうちから、風流好きが斉信の周りに集まって仕掛けてきた試問に相違なからう。

そうなるとこの詩句は、また異なった意味を持つてくる。「蘭省花



時錦帳下」は「われらはこの宮中で、仲間と共に帝のそば近くに仕え、今この栄えある春を迎えている」という意味を含んで来るし、対句の「廬山雨夜草庵中」の方は、「それにひきかえ、私から絶縁されて付き合ってもらえないあなたは、この雨の夜を独りぼっちで、どんなにかつまらぬ思いをしていることだろう」という意味を帯びて来るのである。

しかもこの当てこすり、皮肉なことに現在の清少納言の「すさまじき心地」と、まさに重なっているではないか。癪にさわる。加えて相手の問いかけの、あたかも高みから見下すような姿勢が気に食わない。まるで、この問題に正答したら、一定水準を超えたと思わなくても良いとでも言いたげな趣でないか。清少納言としては、何としても相手に一矢報いたくなる。漢詩句の代わりに和歌の下の句を書いたという彼女の返答は、そういう思わくの上になされたものであった。

したがって相手の送って来た紙に、消し炭で書き付けたというの、返事を催促されたのに対する当座的対処などではなく、練りに練った演出と考えるべきである。「御前おはしまさば、御覽せさすべきを」と困惑したことを言い、「これが未を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と、一人思案に余ったなどと殊勝らしいことを言って、自信なさそうな風を装ってはいるが、それは言葉の上だけのこと。斉信のあまりにも直截的な問い掛けに対して、相手の要求したとおりの解答を、そのまますんなりと書いてやることを潔しとしなかったであろう。

それではあまりにも芸がない。おそらくそういう意思の現れと見てよいであろう。そのくらの詩句なら、よく知っているし、もちろん漢字で書くことなど造作もないこと。でもそれを書いたくらのこと、男性たちから適当に持ち上げられて、それでいい気になっているとは思われたくない。そもそもその程度の詩句を答えられたからと言って、褒められたりするの、かえってこちらのことを見くびって

いるというもの。それならこちらの方でも、相手の思わくをひっくり返すような、挑発的な答えを突きつきたい。そんな考えから、このような返事をしたのだと思しい。

そういう視点に立つて見ると、この解答がいかに見事であったかということが見えてくる。

第一に、和歌に置き換えたことで、「女だてらに利口ぶって漢字など書いて」という、保守論者からの批判をかわせる利点がある。世間にはまだ、女性が漢文を読み書きするのを快からず感じているような、旧弊な考えの者もたくさんいる。そういう人の拒否反応を考慮して、少々へりくだったような、既成の「女らしさ」の演出というのは、それなりに賢い身の処し方と言えよう。そのうえ、漢字の字づらの持つゴツゴツとしたいかめしさから脱し得て、やわやわした印象を相手に与えるといううま味もある。

ところが一見女性らしく遠慮深い姿勢と見せかけて、その実なかなかしたたかなやり口だった。原詩の「夜雨」は、当夜の天候にそっくり譲って、代わりに「誰かたづねむ」と加えて見せた。それによって、殿上人たちに対して、「どうせこの私の住まう粗末な草の庵など、どんなも訪ねてくだらないでしょう」と、拗ねて見せる趣を演出したのである。

若い娘のしたことなら、多分に鼻につくどぎつさがあるかもしれない。しかし、さだ過ぎた中年女性がやってみせると、あけすけな分だけ、かえって嫌味がなくて、陽気でおおらかな媚態が匂い立つて来るというもの。

さらに、自らに見立てた「草の庵」のみすぼらしさを、いつそう強調するのが、消し炭でかすれかすれに書くという表現であるのは、言うまでもない。これほどみじめな私を、こんなさみしい雨の夜に、独りぼっちで置いておくなんて……という甘えが、行間に色濃く漂ってくる。早く以前のようにお訪ね下さいと、我を折って訴える風情。漢

詩文を踏まえながらも、詩句を和歌的に表現するという、女性ならではの演出であったと言える。

## 五、連歌の挑発性

ところがいったんは相手に譲歩して、そういう甘えを演ずると見せて、この句はいっそう挑発的な面を露わにしてくる。なぜならこの「末（＝下の句）」を提示することにより、受け取った相手に対して「本（＝上の句）」の詠出を要求する、いわゆる「連歌」の挑みかけになるからである。

すなわち斉信の立場から言えば、もともと自分の方から出題した試問であったはずなのに、気づいたらいつの間にか自分の方が連歌を試される立場に転換されてしまったのである。見事な切り返しとも言える。こうなると逆に、答えなくてはならない立場に追い込まれたわけであるから、斉信としては焦ったことだろう。

ちなみに連歌というのは、必然的に返歌することを相手に要求する言語遊戯である。「本」にしる「末」にしる、先に相手から詠みかけられてしまえば、必ず付句を返さなくてはならぬというのが決まり事。しかもその際、前の句と後の句は何らかの連関性を具えていることが必須条件とされ、なおかつ仕掛けられたら、素早く応えることを持つて良しとされている。

『枕草子』にはこのような連歌のやりとりをめぐる話題が散見され、定子中宮の周辺では当意即妙を持って賞されるこうした応酬が、頻りに実践されていたことをうかがわせる。中でも「二月つこもりごろに」の段は、当段の「草の庵を……」のやりとりを考える上で、興味深い話題である。

二月つこもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」と言

へば、寄りたるに、「これ公任の宰相殿の」とてあるを見れば、ふとこころがみ懐紙に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとようあひたる、これが本はいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それそれ」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでか事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前おまへに御覽せさせむとすれど、上のおはしまして、御とのごもりたり。主殿司は、「とくとく」と言ふ。げにおそうさへあらむは、いと取り所なければ、「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書いて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢とじだの宰相など、『なほ内侍に、奏してなさむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛督さむらひのぐみの中將におはせし、語りたまひし。

陰暦二月も末にもなつて、寒風激しく雪さえちらつくといった、あいにくの荒天の日、清涼殿上の御局に上った中宮に侍していた清少納言のもとに、藤原公任から手紙が届けられる。おそらくは殿上の間で思いついた座興とらしく、懐紙にさらりと書き流した当座的な手紙。見ると歌の末句がしたためられている。「すこし春ある」というのは、いかにも不自然な日本語である。とても歌の名手として聞こえた公任の言とは思えない。それゆえ少納言には、一目でこれが漢詩文を踏まえたもの言いだと察せられた。

くだんの表現は、『白氏文集』『南秦雪』という七言律詩の第四句、「二月山寒少有春」の後半部分を和歌の韻律にのせたもの言いであり、仲春二月も末の時ならぬ寒さというこの日の空模様を、見事に合っている。清少納言にはこの詩句がただちに想起できた。だからこそ「二月」

や「寒」の文言を受けて、「げに今日のけしきに、いとようあひたる」と評し得たのだから、言うならば第一関門突破というところである。

ただしこの場合、『文集』の知識そのものが問われているのではない。相手から連歌を仕掛けられているのであって、原詩を知っているということはあくまでも基礎基本に過ぎない。問題は、その知識を応用して、どれだけ適切な付句が返せるかである。

そうなると先述のごとく、同じく「南秦雪」中の文言で付句するのが当時の常套である。ちなみに「二月山寒少有春」の句に先立つ第三句は、「三時雲冷多飛雪」で、両者は対句を成している。したがってこの対句を用いて返歌するのが、最も気の利いたやりかたであろう。少納言の返歌を見てみよう。「空寒み」は「雲冷」と、「散る雪」は「飛雪」とそれぞれ呼応しており、この本句がくだんの対句を踏まえて詠まれていることは明らかである。それだけで及第点の解答であるが、そこに和歌の伝統的表現である「落花を雪と見立てる」「降雪を花と見立てる」という趣向が加えられているのである。漢詩句の和歌的応用という点で、きわめて見事な付句ということができよう。

この返答は殿上人の賞讃を浴びた。才人源俊賢が、「なほ内侍に、奏してなきむ（＝天皇に申し上げて彼女を内侍の地位につけてやろう）」と評したというのである。

「内侍」というのは、一般に「掌侍」を指し、従五位相当とされる。天皇のそば近くに侍し、雑務全般を司る職柄であるから、有能な者でなければ務まらぬところであろう。もちろんただ有能というだけでは不足で、もの言いや立ち居振る舞い、容貌、着こなしに至るまで、劣りがあったては務まるまい。上流貴族の令嬢は措いて、宮仕えをするような家柄の出身者、つまりは清少納言のごとき立場の女性であれば、憧れの地位に他ならなかったと言えよう。現に『枕草子』中「女は」という段の冒頭に、「女は、典侍、内侍」と挙げられているほど。さらに定子中宮の実母高階貴子は、(当時としては異例のことであるが)

「高内侍」という名で宮仕えを経験した女性であり、本格的な漢文の学識を具えた才媛として知られている。かつ色好みの藤原道隆の心を射止めたことを思えば、相当な美貌でもあったと思しい。

当時において、「内侍に推挙しよう」というもの言いは、したがって、「才色兼備の女性だ」という賞讃と、ほぼ同義であったと推定される。最高の讃辞と言つて良い。

さてこの「二月つごもりごろに」という段、時期の点でも、荒天という点でも、主殿司を遣わして御前に手紙が届けられるという状況も、「頭中将のすするなる……」の段とよく似ている。また、かたや斉信、かたや公任という、抜群の英才たちからの試問である点、その試問が二つながら『文集』を踏まえた内容である点でも両段は共通し、さらに清少納言が思案に余つて、定子中宮に相談したいと思つたとある点でも、その頼りの中宮が寝所に入つていたために、苦しみながらも独り対応したとある点でも、相似しているということがわかる。

それだけにかえつて、両者の相違点が鮮やかに見て取れよう。殿上人たちからの漢詩文を踏まえた言葉掛けに対して、当意即妙に切り返す少納言。その点では両段とも共通している。その応答は男性たちの賞讃を浴びて、めでたく幕引きとなるという展開が予想されたのに、「頭中将のすするなる……」の段ではそうすんなりとは運んでいかないのである。そもそも斉信は漢詩句での解答を要求したのであった。ところがその問いかけに対し、少納言が敢えて和歌の下句で返したために、結果的に連歌を挑む形になって、逆に本来の出題者であった斉信をやりこめることになったのである。まさしく田辺聖子氏が指摘するところの、「彼らに（やられた！）と叫ばせたエピソード」というのにふさわしい例だと言えよう。

## 六、会話における学識の効能

清少納言の返事を受け取った斉信たちの反応ぶりを、先にも触れた源中将宣方の後日譚によって見ておこう。

頭中将の宿直所にすこし人々しき限り、六位まであつまりて、よろづの人の上、昔今と語り出でて言ひしついでに、「なほこの者むげに絶え果ててのちこそさすがにえあらね。もし言ひ出づる事もやと待てど、いささか何とも思ひたらず、つれなきもいとねたきを、今宵あしともよしとも定めきりてやみなむかし」とて、みな言ひ合はせたりし事を、「ただ今は見るまじ」とて入りぬ」と、主殿司が言ひしかば、また追ひ返して、「ただ手をとらへて、東西せさせず乞ひ取りて、持て来すは、文を返し取れ」といましめて、さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いととく帰り来、「これ」とて、さし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかどうち見たるに、あはせてをめけば、「あやし、いかなる事ぞ」と、みな寄りて見るに、「いみじき盗人を。なほえこそ思ひ捨つまじけれ」とて、見さわぎて、「これが本つけてやらむ、源中将つけよ」など、夜ふくるまでつけわづらひてやみにし事は、行く先も、語りつたふべき事なりなどなむみな定めし。

これによれば、相手のよこした手紙の料紙に書き付けて送るといふ清少納言の演出は、読まずに返したかという衝撃を、いったんは殿上人たちに与え得たことがわかる。これも相手を動揺させる効果であったことは疑いない。だからこそ、文を開いた時の驚愕はいつそう増大する仕組みであった。しかもその返事たるや、連歌の挑みかけという、予想に反したものであった。「いみじき盗人を」というのは、油断のならない相手に対する讃辞4というところであろうか。

結局のところ、斉信たちはさんざん付句を試みた後、付けわづらつて諦めることになった。つまりは自分たちの敗けを認めたことになる。

「今は御名をば、草の庵となむつけたる」、すなわち少納言の返事の一句を冠してその名を呼ぶことで、永く相手の風雅をたたえようということであった。

こののちついに「袖の几帳なども取り捨てて、思ひなほりたまふ」とあつて、一時は顔を袖で覆い隠して、清少納言を見ないようにしていたという斉信が、機嫌を直してもとのように仲良く付き合うようになったというのである。

ところでここで特に注意したのは、この「敗け」がある意味で、初めから想定されていたものであつたらうということである。

先述したごとく清少納言との交渉断絶に、斉信が不如意を感じていたことは明らかであるし、彼が二人の関係回復を待ち望んでいたらしいことも確実である。そのために漢詩文の一節を訊くという行動を起こしてきたわけである。それゆえ当然のこと、清少納言の知的水準が測られ、彼女が答えられるであろう出題のレベルが、慎重に検討されたことと推察される。「みな言ひ合はせたりし事」と本文にあつたごとくである。だから彼女が即座に『白氏文集』の詩句を想起し得たからと言つて、特別に瞠目するには値しないと言える。

だからと言つて、さして豊かでもない漢学の知識を「したり顔に」振りかざし、「賢しだ」つている軽薄な人格だと、先に引いた『紫式部日記』と同様な非難をしようと考えているわけではない。

そもそも社交的会話の場における「学識」というものは、相互に理解し合えることをもつて發揮し得る性格のものである。いかに深淵なる知識であつたところで、相手に理解され、共有されなければ会話成立には至らない。したがつて漢文引用に当たつては、会話の相手の知的水準が測られるのは当然のことなのであつた。

問われるべきは引用される漢籍の難解さや、知識の深遠さではなく、漢文引用表現における即座の共通理解と、その臨機応変の活用の仕方



であることはすでに述べたところである。

さらに肝要なのは、会話場の雰囲気である。一座の空気が和まなくて、せつかくの会話が生きないのである。難解で深淵に過ぎる漢文引用は、それゆえ独善的に陥ることで、社交という意味では逆効果になる。そういう観点から「頭中将のすずろなるそら言を」一段の漢文引用を見てみよう。斉信と清少納言の仲たがいの話題から始まったこのやりとり、漢詩文の引用と、その予想外の応用とによって、一座の雰囲気は完全に和み、笑いの中で、二人の間にあつた険悪な状況は解消される。それこそは社交の場における漢文引用の最も重要な機能と云つて良い。

清少納言の漢才をめぐることは、先述したごとく生意気で嫌な女だと誹謗されることが常であつた。しかし現実には作中の例を見ると、殿上人と少納言の間に漢詩文をふまえたやりとりがなされると、それをめぐつて笑いが生じ、一座の雰囲気や和んでゆく展開が多いことが明らかになる。藤岡作太郎氏が「驕慢の性」「傲慢人を凌ぐ性」と難じた印象とは裏腹に、現実には明るく陽気な漢文引用であることがわかる。氏自身がいみじくも指摘しているごとく、「かれらが少納言を愛するは、その学識をめぐるもの」であつて、殿上人たちは清少納言の漢才を楽しんでいたのである。

## 七、「自讚」の誇り

にもかかわらず、なにゆえ『枕草子』の漢文引用については、特に作者の人格の劣りに関連付ける形で、浅はかな「自讚」と貶められるのであろうか。そもそも「自讚」が、「自分の記念すべき事績を自分で書く」謂いで用いられるなら、日記文学などは総じて「自讚」といべきであり、ひとりこの作品のみが誹謗される所以はなからう。

たとえば『紫式部日記』の冒頭には、秋の朝、藤原道長が邸内を見

まわりながら、式部の局を訪れる様子が描かれている。

殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御様の、いとほづかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわるからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

をみなへし盛りの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

「あな疾」とほほ多みて、硯召しいづ。

オミナエシは「女郎花」と書き、「(美しい) 女性」を象徴する歌材である。それを「一枝折らせ」て「几帳の上よりさしのぞ」いたと、いかにも二人の関係がただならぬものであるかのごとく述べたうえで、自分がさし出した和歌に対し、「あな疾(あな疾、ずいぶん)と早く詠んだことよ」と微笑しながら、返歌のために硯を召し寄せたと自己の日記にしたためる。漢詩文引用と和歌詠出と品こそ違え、紛れもなく「自讚」に他なるまい。

しかも本来は、女主人彰子中宮の初めての男皇子出産という映え映えしい記録として書かれるべきであつたと思しきこの作品の巻頭に、自分と道長の男女関係をほのめかし、自らの漢才を主人に評価されたという記事を置いたあたり、この作者の濃密な自己愛と、並々ならぬ自意識とがねっとり匂ってくる。これに比べれば『枕草子』の「自讚」など、田辺聖子氏の評価のごとく直截的ただけにかえつてすがすがしいとも言えよう。

にもかかわらず『紫式部日記』における「自讚」は責めを免れて、初めに挙げたように『枕草子』にのみ、己が「学識」の「自讚に充ちて」いるという評が付いて回っている事実には、改めて不思議の感を禁じ得ないのである。そうしてそれはおおむね、作中の「学識」の顕示を、浅はかで不愉快な行為と冷評する見方であることは言うまでもない。



不公平と言うほかはあるまい。

たとえば、くだんの『紫式部日記』を採り上げて、『源氏物語』作者としての式部を讃える安藤為章『紫家七論』など、式部は誠に古今独歩の才と云べし。いにしへより清紫といひならはしたれど、清少納言は才気狭小にして、さかしだちたる跡あらはに、にくさげおほき物なり。同日にも論ずべからず」と述べている。「にくさげおほき物」というのであるから、それは『枕草子』の漢文引用表現において、相手に不快感を与えているようなものを指して評しているわけで、だとすれば主に日記的章段中のそれを対象になされていると考えられる。

利宗本藤  
しかしながら実例に即して見て行けば、作中の漢文引用が対人関係を悪化させた例は一つもないことがわかる。相手をやり込める場合はあっても、その発言を機に、結果として一座の雰囲気は和み、笑いの中に円満に事が収まって行くのは先述のごとくである。何をもちて「にくさげおほき物」と貶められねばならないか、はなはだ疑問と言わざるを得まい。

『紫家七論』はその名のとおり、紫式部を七つの特性から評し、その「徳」を讃える性格の書であって、くだんの少納言非難も、式部の「文章無双」を絶賛すべく、その対照として引き合いにされたされたものである。そう言えば先に引用した中野孝次氏や藤岡作太郎氏の評も『紫式部日記』を踏まえての言であったことに改めて注目したい。

改めて藤岡氏の論を見たい。氏は、少納言の「穎才表に顕われ、傲慢人を凌ぐ性は、篇中至るところに見」えるゆえに、「さればこそ紫式部日記に評して、『清少納言こそしたり顔に、いみじう侍りける人、さばかりさかしだち、真名書きちらして侍る程も、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり』とい」っているのだ、と述べている。さかしだちて漢才を振りかざす姿に、「反感をおぼえる同時代の眼の代表として、『紫式部日記』の記述を置いているのである。

『枕草子』を実際に検証すれば、日記的章段内の漢文引用のほとんどが、中宮や殿上人からの言い掛けに応じた発言であることは先述したとおりであり、だとすれば仮に少納言の「傲慢人を凌ぐ性」が「篇中至るところに見」えるほどに顕著なものであったとしても、彼女の周囲の人たちはそれを容認し、むしろ好意を持っていたのだと見ることができる。だが実際の用例の陽気で和やかな笑いに満ちた雰囲気にもかかわらず、「にくさげ」の「驕慢」のと誹謗されるのは、どうやら『式部日記』中の「したり顔」さかしだち」という発言に由来するところが多いと推察される。特に『七論』の言うところの「才気狭小にして、さかしだちたる跡あらは」だとする評など、「さばかりさかしだち、真名書きちらして侍る程も、よく見ればまだいとたらぬこと多かり」というもの言いと、まさしく重なっており、その強い影響が想定されるのである（傍線は引用者による）。

しかしながらこの少納言評、果たして鵜呑みにして良いものであるうか。実は『紫式部日記』には、この評と並んで和泉式部・赤染衛門の人物評が置かれている。そのうち好意的に書かれている赤染評は描いて、和泉への評価は注目に値する。「口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢ」と、その天才肌の資質については認めつつも、その歌学のみたしなみに対しては「いでや、さまで心は得じ」と軽んじ、「はづかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず（＝たいして立派な歌人とは思えない）」と切つて捨てる。

現在、和泉式部と紫式部とを比べて、歌才において紫が和泉を凌駕すると評価する人はいないだろうが、この評価は一条朝においても変わらず、同時代の女流歌人の詠をほとんど採らない『拾遺和歌集』が、数少ない例外として、和泉を入集させている事実をもってしても明らかであろう。その相手を、「自分が気後れるほどの歌才ではない」と断言する、この自信はどこからくるのであろうか。

つまりこの人物評が明らかにするのは、紫式部という個性が並々

らぬ強い自意識の持ち主であったことと、その自意識が、自己の価値観と相容れぬ個性を、認め得なかったということに他ならない。和泉式部の場合がそうであるなら、清少納言の漢才についての評価も同様な傾向を認めてしかるべきだろう。私はあの人を認めない。だからあの人はダメなのだ。相手に対する自己の「好悪」を、相手の「良し悪し」にすり替えて論ずる眼。自己の判断が絶対とばかりに、他者を断定して憚らぬ姿勢。結局のところ、そこに収斂する論理なのである。

そうした強烈すぎる自意識は、宮廷のような協同の場においては、しばしば軋みを生ずるものであったことは、推量するに余りある。実際『紫式部日記』の中には、左衛門の内侍や馬の中將という一条帝方の女房、齋院方の中將などという女性たちとの不和をうかがわせる記事が散見される。特に左衛門の内侍においては式部に対して不快感をむき出しに、「あやしうすすろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ、心うきしりう言こと（＝いわれのない悪意に満ちた陰口）」を宮中で言いふらしていたと、日記に述べられているくらいで、「にくきげおほき」と思われていたことが明らかである。他者との協同という視点から見直した時、和していけなかつたのは紫式部の方であつたらう。

## 八、「協同」の場における対応の差異

こうした「協同」的な言語活動という視点から、改めて『枕草子』と『紫式部日記』を見返してみたい。

当段では先述のように清少納言の返事に対する殿上人たちの評判は、翌朝になって源宣方によって局にいた少納言のもとにもたらされる。この人物は「故殿の御服のころ」の段でも斉信とともに登場し、彼の引き立て役として描かれている人物である。言わば二枚目半といった役どころであり、斉信・少納言両者ともウマの合う人物らしいから、おそらく二人の不和を気に掛けて、それまでも仲を取り持とうとして

いたのであろう。

その彼が局の前で、「ここに草の庵やある」と呼ばうと、「そんなみずぼらしい名の者はおりません。『玉の台うづな』とでも呼んで下さるなら、ご返事いたしましょう」と応えている。そのような貧乏くさいあだ名を奉じられたことを、心から迷惑がっているのではない。迷惑そうな演技をして見せたのである。世捨て人ではあるまいし、後宮女房をつかまえて、「草の庵」だなどと失礼なと、ちよつと拗ねた風情で応対に出ることで、場の空気は和み、いちだんと華やいだことだろう。まさしく「座持ち」の名手たるにふさわしい、当意即妙な応答と言えよう。

この応答ぶりに対して、萩谷朴氏は新潮日本古典集成『枕草子』の頭注において興味深い指摘をしている。氏は『紫式部日記』において紫式部が「左衛門の督かみ」という人物から「わかむらさき」と呼びかけられた逸話を引いて、日記の中に取ってそれを書き記したのは、清少納言の「草の庵」というあだ名のエピソードを紫式部が意識し、自らの優越を顕示した結果だと述べている。

左衛門の督かみ、あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふさぶらふとうかがひたまふ。源氏にかかるべき人もみえたまはぬに、かの上は、まいていかでかものしたまはむと、聞きゐたり。

宮仕えに関する日記を書くにあたって、『枕草子』は当然意識しないではいられなかつたはずで、当段の内容も知っていたことであろう。優越感をいだいていた可能性も、大いにあり得るが、それはともかくとして、萩谷氏の指摘はこの二つの記事の間の類似性に着目し、宮廷という場でそのような類似の状況に臨んだ際の、紫式部と清少納言の対応の差異という、興味深い観点を提示していると言えよう。

少納言の対応については上述のごとくであるが、対して式部の対応ぶりはいかがだったのであろうか。彼女は「聞きゐたり」と書き記している。つまり聞き流していたということになる。

「光る君のごとき殿方はどこにもおいでとは思われませんので、ま

してや紫上のようなすてきな方など、おいでのはずはございませんでしょうに」などと、華やかに答えて周囲を笑いで満たしたというのであれば、それはそれで気が利いていよう。だが実際には、ただ黙って聞いていた、もつと言えば、返答を拒んだ、無視したというのであるから看過できない。もしもこれが単に「言葉の綾」というような表現ではなく、字義通り「聞きぬたり」だったのであれば、ずいぶんと非社交的な、それこそ人を人とも思わぬ、傲慢な態度と言うべきであろう。藤岡作太郎氏が清少納言を指して評した「傲慢人を凌ぐ性」とは、むしろこういう態度にこそ当てはまると言えよう。

ましてくだんの「左衛門の督」なる人物が、通説で言われるごとく藤原公任であったなら、さらにこのことが寛弘五（一〇〇八）年十一月一日、敦成親王の生誕五〇日を祝う祝宴当日の出来事であったのだとすれば、まさしく驚き入った次第である。この日記の作者は、宮廷という協同の場を、いったいどのような考え方でとらえていたのかと、改めて深く疑問をいだかざるを得ない。

紫式部の仕えた彰子中宮は、長保元（九九九）年に入内してから、足掛け十年にしてようやくこの年懐妊した。しかも運の強い人というのは、どこまでも恵まれているもので、初めての子どもがなんと男児であり、母子ともに健全。良いこと尽くめであった。父の道長にとっては待ちに待った皇子誕生であったのだから、この五十日の祝いの宴席は主家の祝賀の雰囲気で満たされていたことは、推量に余りある。

そのめでたく華やいだ笑いきざめきのすぐ傍らに、紫式部自身も控えていたことは確かであろう。そこへ公任ほどの人物が寄って来たたすれば、それ自体、式部にとっても、また彰子中宮にとっても、名誉なことであつたことは間違いない。しかもいくら酔いの紛れとは言え、式部の作品の主人公——こともあろうに絶世の美女の紫上になぞらえて呼びかけたというのであるから、一生の面目これに尽きると言わんばかりの名誉であつたことであろう。それを、適切に応答しなかつた

というのは、中宮女房としていかなるものであろうか。

『紫式部日記』には、中宮方に訪れる客人への対応ができぬ上臈女房の引つ込み思案を、「さのみして宮の御ため、ものの飾りにはあらず、見苦しとも見はべり」と非難しているが、自己の行為を顧みてこの人は何と言おうとするだろうか。主家の祝宴の席上でのこうした黙殺行為こそ、まさしく「ものの飾りにはあらず、見苦し」という非難に当たると言えまいか。

さらに他者との協同という観点からこの対応を見るなら、式部の無視にあつた公任の立場はいかがであつただろうと考えざるを得ない。宴席での男女のやりとりであるからには、本心ではないにしろ艶めいた雰囲気や漂う口調であつたことは、想像に難くない。公任としては、一介の女房にここまでのご機嫌取りを仕掛けていたのだから、当然相手は喜んでおしゃべりに応ずるものと予想していたであろう。ところが、案に相違して相手は、呼びかけに返答しない。簾の外で、さすがにすぐには立ち去ることもならず、引つ込みのつかない思いを噛みしめながら、苦り切っている公任の姿を想像すると、気の毒でならない。さぞかし不体裁だつたことと思われるし、傍らで見ていた殿上人もいたたまれなさを禁じ得なかつたろう。

こんなにも相手に恥をかかされれば、不快に思わぬ方が不思議であろう。せんかたなくこの場を立つて行く公任の胸中に、かつての宮中の華やぎの記憶が蘇つたことであろう。開放的で陽気だつた定子後宮。殿上の所在なさの紛れに、皆で言い合せて、『白氏文集』などを踏まえつつ、ちよつと洒落たことを言い掛けてやれば、打てば響くように手ごたえのある応答があつた、あの知的で粋な雰囲気になつかしい。

実際、そういう感想をいだく殿上人・上達部は多かつたらしく、『紫式部日記』によると彼らは、彰子後宮の陰気で不風流な雰囲気を「中宮の人埋もれたり」と誇つたという。そんな時、彼らの脳裡に一昔前の対照的な後宮のことが浮かんだと考えても、そう不自然なことでは

ない。そういう時に必ず殿上で人々の口の端にのぼるのが、定子後宮の旗頭的な存在として、いつでも彼らの良き挑み相手であった清少納言の、当意即妙な受け答えであつたらう。

定子後宮の秀囲気が殿上人にとって魅力的であつたことは、『栄花物語』輝く藤壺の巻に、次のように描かれているところからも明らかである。

故関白殿（＝道隆）の御方は、いとものはなやかに今めかしう愛敬づきて気近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も細殿つねにゆかしうあらまほしげにぞ思ひたりし。

彰子が、道長の絶対的な権勢を後ろ盾として、「輝く藤壺」と謳われた豪奢な後宮を経営していた時である。換言すれば定子方は、その道長によって完全に圧倒されていた時期であつた。そんな零落の後宮を、にもかかわらず殿上人は風雅な遊び所として、理想的と考えていたというのである。そうして彼らが訪ねてゆくと、誰よりもおもしろく応対して、彼らを楽しませてくれるのは、ほかならぬ清少納言なのであつた。

内裏わたりには五節、臨時の祭などうちつづき、今めかしければ、それにつけても、昔忘れぬさべき君達など参りつつ、女房たちとも物語しつつ、五節の所どころの有様など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにも勝りてをかしう誇りかなるけはひを、なほ捨てがたくおぼえて、二三人づつつれてぞつねに参る。

《『栄花物語』とりべ野巻

殿上人にとって理想的だつた定子後宮の風雅も、定子の夭折と共に滅んで久しい。その華やかさの記憶と比較されては、始終「埋もれ」ていると非難される彰子後宮の女房たち。その彰子方の女房を代表する立場として、否が応でも清少納言と対照されてしまう紫式部にとつては、少納言の「をかしう誇りか」な言動は、自分には決して真似の

できない行為として、憧れの的である一方で、絶対に容認できない行為として、完全否定されなければならない対象でもあつた。その複雑な両面価値性が、くだんの少納言批判につながっていると考えれば、その容赦ない激烈さもあながち無理からぬところであらう。

※古典作品の引用は、原則として小学館新編日本古典文学全集の本文に拠りつつ、表記等を適宜改めた。

#### 〔注〕

(1) 本文は中野氏の引用のまま。「いとたへぬこと」は、小学館新編日本古典文学全集本では「いとたらぬこと」とする。

(2) この返事の用意周到さについて、萩谷朴氏は新潮日本古典集成『枕草子』の頭注において細かく論じている。参考にされたい。

(3) 返事をするに当たつて、清少納言が中宮の意見を求めたと述べている点に注目したい。このやりとりが少納言個人の優劣を決定するだけでなく、定子中宮の女房として、後宮全体の風儀の質を問われる性格を有し、中宮はその代表として後宮の風雅を統括する立場であつたことを示す記述である。同時にこの中宮が、漢詩文引用について相談するだけの充分な学識の持ち主であつたことを言外に強調している。しかも「二月つごもり」段では、相談できなかつた理由として、天皇と共寝しておいでだつたためと述べて、定子に対する帝寵のあつさをも印象付けていることは見逃せない。

(4) 「盗人」の語について、新潮集成本の頭注は興味深い。萩谷氏によれば「草の庵をたれかたつねむ」は、「藏人たかただ」なる人物に向けて、藤原公任が詠みかけた連歌の末句であり、清少納言がとつさに、当代随一の歌人の句を借用した機転を賞して、「盗人」と言つたとする。そうだとすれば、自分の句を使われたことを知つた公任が、そのお返しとばかりに、少納言を名指しして連歌を挑んできたのが、「二月つごもり」の段か、などと想像は膨らむが、それについては稿を改めたい。



(5) 後世の例であるが、『平家物語』巻五・月見に名高い「待宵の小侍従」の逸話などが印象深い。

(6) 実際『栄花物語』初花巻には、敦成親王誕生をめぐる様々な祝賀の模様を、『紫式部日記』の記事を資料として描いている。興味深いことに、『日記』に挿し挟まれる出家遁世への願望などの文言は、『栄花』ではすべて削除されており、本来この『日記』があるべきだった、中宮や主家の栄華の記録としての姿が想像されておもしろい。

(7) 『紫式部日記』の巻末近くには、二度にわたる道長との和歌の贈答の記事が置かれている。「すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらしとぞ思ふ」「夜もすがら水鶏くひなよりけになくなくもまきの戸口にたたきわびつる」という道長詠は、「梅の実の酸き」との掛詞である「好き者」、「折る」、「水鶏—たたく」などの表現を用い、いずれも男女間の情交を思わせて意味深長である。巻頭の「女郎花—折る」という表現との連関性がうかがえ、『日記』の首尾をこのような艶めいた贈答歌の記事で括ろうとした意図に興味をおぼえるが、後稿を待ちたい。

(8) 『栄花』とりべ野巻の例を、藤岡作太郎氏は清少納言の「驕慢の性」「傲慢人を凌ぐ性」に対する同時代人の非難の言と見ているが、実際の用例に即して見れば、これは明らかに讃辞である。不遇にも屈せず誇り高く振る舞って、定子後宮を活気に満ちた空間にしている女房たちと、その代表たる清少納言の心意気が、殿上人たちには魅力的に映ったという事実を示している。

(平成二十八年九月三十日受理)